

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：17102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20027

研究課題名（和文）周辺部におけるスペイン語呼びかけ表現に関する語用論的研究

研究課題名（英文）A Pragmatic Study of Spanish Appellative Expressions in the Periphery

研究代表者

野村 明衣（Nomura, Mei）

九州大学・言語文化研究院・助教

研究者番号：00962854

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はスペイン語の呼びかけ表現が位置によってどのような機能を果たすか、また各形式本来の語彙的意味との関連性を解明した。これから情報を伝達する発話頭では呼びかけ表現は聞き手の注意を喚起する機能を持つが、どのように喚起するかは各形式の語彙的意味によって異なる。また伝達後の聞き手に情報を受け渡す位置である発話末では、発話頭と比べると多くの語彙意味が強く現れてどのように情報を伝達しようとしているかを表す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究では位置による機能についての言及が少なく、特に発話末の機能は強調や和らげといった抽象的な記述しかなかった。本研究は、スペイン語の間投詞を日本語の終助詞「ね」「よ」との対照することによって得られたスペイン語の情報伝達時における特徴をもとにしたこと、非母語話者がスペイン語で円滑なコミュニケーションを実施するための呼びかけ表現習得を目的としたことにより、スペイン語母語話者による抽象的な解説を、呼びかけ表現が使用される位置と語彙的意味による機能から再定義した。本研究の呼びかけ表現の語用論的機能の体系化に寄与にとどまらず、今後の日本人のスペイン語教育にも有用だと考える。

研究成果の概要（英文）：This study elucidated how Spanish appellative expressions function depending on their position and their relation to the original lexical meaning of each form. At the beginning of an utterance, where information is about to be conveyed, appellative expressions function to attract the listener's attention. However, the way they do so varies depending on the lexical meaning of each form. At the end of an utterance, which is the position where information is handed over to the listener, many of the lexical meanings become more prominent compared to the beginning of the utterance, reflecting how the speaker intends to convey the information.

研究分野：語用論

キーワード：スペイン語 談話標識 間投詞 注意喚起 発話態度 周辺部

### 1. 研究開始当初の背景

スペイン語の呼びかけ表現は口語の談話標識の一種で、円滑なコミュニケーションを実現する上で必要不可欠な言語形式である。命令形式 *fíjate*, *imagínate*, *oye*, *mira*, *escucha*、疑問形式 *¿verdad?*, *¿no?*, *¿sabes?*, *¿entiendes?*, *¿comprendes?*, *¿ves?*、*hombre* や *mujer* といった呼びかけ語が含まれる。従来の先行研究では呼びかけ表現の機能を羅列するばかりで、それぞれの形式がどのように異なるのかを言及するものは見られなかった。例えば、動詞 *oír* の命令法 *oye* と *escuchar* の命令法 *escucha* は、どちらも「傾聴する」という聴覚を表すが、従来の先行研究ではその機能についていずれも聞き手の注意喚起という記述ばかりで、両者の差を扱っていなかった。しかし、*oír* は受動的な聴覚を、*escuchar* は能動的な聴覚を表すことや、スペインのスペイン語では *oye* の使用が *escucha* よりも圧倒的に多いことから、この2形式には何らかの機能の差があることが推測される。また、聞き手の名前や話し手との社会的関係(親子、恋人など)を表す呼びかけ語は、発話末では発話強調や発話緩和の機能を果たすとされているが、動詞 *entender* (「理解する」)の2人称単数への疑問形式 *¿entiendes?* にも同様の機能が挙げられている。確かに聞き手の名前を呼んだり、理解したかを問うことによって話し手の一方的な情報伝達ではなく、聞き手の反応をうかがおうとする態度を表明するという意味においてはいずれも発話緩和となるが、その働きかけの方法は呼びかけ語と *¿sabes?* では明らかに異なる。

このように、これまで主に母語話者を中心に解明されてきた呼びかけ表現の機能は彼らの直感による記述が多く、各形式の機能を比較し、その差が何に由来するものなのかを扱う研究は見られなかった。スペイン語の談話標識の研究者はスペイン語母語話者や、同じ言語系統の研究者が多く、その記述にも関心が持たれていなかった。すると、日本語のようにスペイン語とは全く異なる言語系統の母語を持つ学習者にとっては、個別の事例の理解に留まり、その習得には至らないという状況であった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、まず第1に、スペイン語の呼びかけ表現について、周辺部である発話頭と発話末の機能を解明し、各位置における語用論的機能を記述することである。情報伝達前の位置である発話頭と情報伝達後の発話末では、聞き手への働きかけは大きく異なることが推測される。本研究で調査対象とした呼びかけ表現には、野村(2014)で扱ったスペイン語の聞き手めあて表現が含まれており、その中で結論づけた発話頭では聞き手の注意喚起、発話末では話し手の発話態度の表明という位置による機能が、他の呼びかけ表現にも当てはまるのかを考察する。

そして第2に、動詞派生の呼びかけ表現の語彙的意味と脱意味化の度合いを明らかにし、間主観化(話し手の聞き手に対する発話の伝達態度)の観点から聞き手への働きかけの機能を考察して全体を体系づけることである。野村(2014, 2016, 2018)を通して、発話末と比べて発話頭では脱意味化の程度が高く、この位置で使用される呼びかけ表現はいずれも注意喚起の機能を果たすことが推測される。しかし、発話頭で使用されやすい呼びかけ表現の中にも脱意味化の程度差があり、この程度差が「どのようなプロセスで聞き手に注意を喚起するのか」という語用論的機能を深く関わっていると考えられる。したがって、各形式の語彙的意味から呼びかけ表現の機能を再定義し、さらに脱意味化の程度差を考察すること、さらに第1の目的である位置による機能と関連づけることによって、呼びかけ表現全体の体系化が可能だと考える。

またこの研究成果は、スペイン語における効果的な情報伝達方法の一般化、そしてこれまで国内では全く扱われてこなかったその教育法への貢献が期待できる。スペイン語を外国語として研究しているからこそ学習者の目線から、直感ではなく、学習する上で必ず学ぶ語彙の意味を通して、そしてそれが使用される位置という統語的特徴からの体系的説明を試みた。

### 3. 研究の方法

本研究は、自然な対話かつ文脈の確認が可能な資料体を用いて、量的研究と質的研究を組み合わせて調査を行った。

量的研究として、スペイン王立アカデミーによるコーパス(CORPES XXI)を用いて戯曲と映画脚本の用例から各形式の出現位置の統計的なデータを収集した。出現位置によって各形式の機能を大まかに把握することができるが、いくつかの呼びかけ表現は発話頭と発話末の両方で使用されるものもあった。また、脱意味化の度合いを調査するため、文脈上に本動詞の潜在的な目的語があるか、具体的な行為を要求しているかを全ての例で確認してその割合を求めて、脱意味化の程度差の傾向を把握した。

質的研究としては、まず量的研究で収集した用例から各形式が使用されやすい文脈と、その例における語用論的機能を考察し、情報伝達方法の仮説を立てた。次に、仮説をもとに例文を作成し、スペイン語母語話者を対象に Google form を用いてアンケート調査を実施した。アンケート調査では、3つのセクションを用意した。第1に位置による機能考察のため、例文を複数提示し、

発話頭の呼びかけ表現を発話末に、発話末を発話頭に置き換えることができるかを問い、各位置で情報伝達方法が異なるかを検討した。第2に、調査対象となる言語形式の前後の発話や文脈を記述してもらい、その機能を考察する談話完成タスクを実施し、同じ文脈で *oye* と *escucha* のような類似した機能を持つと推測される形式がどのような発話を導くのかを調査した。この談話完成タスクの調査結果は、先行研究では記述されなかった各形式の語彙的意味からくる機能差、そしてそのプロセスが語彙的意味によるものかを解明する上で非常に有用であった。呼びかけ表現が使用される文脈の分析で立てた仮説を修正した上で、第3に呼びかけ表現が同一文脈で類似する他の形式に言い替え可能かを問い、各形式の仮説を検証した。

#### 4. 研究成果

本研究では、主に命令形式 *fíjate*, *imagínate*, *oye*, *mira*, *escucha* と疑問形式 *¿entiendes?*, *¿comprendes?* について以下の研究成果を得た。

野村 (2023) では命令形式 *oye*, *mira*, *fíjate* について、発話頭と発話末の機能を考察した。動詞 *mirar* (「見る」) の命令法 *mira* は、脱意味化して具体的な行為を促さない *mira* 型と、文脈状に視線を向ける対象が存在し、具体的な行為を促す *mira* 型に分類される。*mira* 型は *mira* 型よりも脱意味化の程度が高い。また、*fíjarse* (「注意する、気づく」) の命令法 *fíjate* は、語彙的意味を残した命令である。それが抽象的な行為なので脱意味化しているように見えるが、語彙的意味そのものが注意喚起なので、脱意味化して注意喚起となる *mira* I 型、*oye* とは本質的に異なり、*mira* II 型と同様に語彙的意味を残した命令である。発話末では *mira* は視覚を通して先行発話に注視を促し、その内容の追認を促す。また、*oye* は先行発話に注意喚起することによって発話内容に含まれる話し手の驚きや怒りが顕在化する。*mira* や *oye* によって先行発話に注意喚起をした結果、強制的に発話を伝達する。

また、Martín Zorraquino y Portolés Lázaro (1999) は *mira*, *oye* が本動詞の場合は目的語や修飾語を伴うが、脱意味化した談話標識は目的語を伴わないと説明していることから、*fíjate*, *imagínate* (動詞 *imaginarse* 「頭の中に思い浮かべる、想像する」の命令法)、*oye*, *mira*, *escucha* が目的語、修飾語、補語をとる割合を調査した。その結果、*imagínate* は想像する対象が文脈上確認されるので脱意味化していない命令だと言える。

次に、*oye*, *mira*, *escucha* が交換可能とする先行研究の記述を検証するため、談話完成タスクを実施して各形式の機能に差がないのかを考察した。*mira*, *escucha* は、いずれも聞き手に能動的に意識を向けるよう促すことによって聞き手を後続発話の理解に導こうとする機能を持つ。*mira* が話し手の判断を断定的に提示するのは、その語彙的意味が本来的には聞き手がその対象を視覚で確認できることによる。これに対して *escucha* は聴覚を表し、注意を向ける対象を話し手が聞き手に伝達する必要があるため、話し手の判断のプロセスを提示する。また、受動的知覚を表す *oye* は、脱意味化の程度が高く、情報提示としては特別な意味素性を持たない無標の注意喚起である。これら3形式の考察を通して、語彙的意味と脱意味化の程度に関わっていることが明らかとなった。

さらに、Martín Zorraquino y Portolés Lázaro (1999) は文法化した動詞の呼びかけ表現は、2人称単数形であっても複数の聞き手にも使用できると述べていることから、*oye*, *mira*, *escucha* の発話頭と発話末での文法化の有無を調査するため、各形式を複数の聞き手に使用できるのか、またその待遇表現である *oiga*, *mire*, *escuche* も同様に文法化しているのかを、母語話者へのアンケートで調査した。発話頭では *oye*, *oiga*, *mira*, *mire* は単数形でも複数の聞き手への使用が可能であり、文法化していると言えるが、*escucha*, *escuche* はその容認度が低く、文法化していないと言える。また発話末では、感嘆文に伴う場合の *oye* の容認度は非常に高いが、命令に伴う場合には容認度が下がった。これは野村 (2018) で考察した発話の「聞き手めあて性」と関連していると考えられる。聞き手めあて性は本来日本語学における概念だが、*hombre* の機能を考察する際に援用した。命令文はそれ自体が聞き手に明らかに向けられており、その後さらに聞き手に働きかける呼びかけ表現の付加は、命令を2度繰り返すような印象を与え不自然である。一方、感嘆文は話し手の感情表出なので聞き手めあて性が低く、呼びかけ表現の付加はそれが聞き手に向けられていることを表明するので容認度が高いのである。また、*mira* は発話末では *oye* よりも容認度が低く、実際に視線を向ける場合など使用場面が限定されると推測され、*escucha* は発話末では不自然であった。また、いずれも3人称単数形の待遇表現は、2人称単数形よりも容認度が低い。待遇表現は聞き手に配慮する形式であるため、2人称単数形よりも聞き手めあて性が高いとめだと考えられる。

*Oye*, *mira* については、日本人の学習者への教育法も実践した。九州大学のスペイン語履修者70人を対象に *oye*, *mira* の用例を提示し、何の説明せずに回答した結果と、*oye*, *mira* の語彙的意味とそこから派生する語用論的機能、また *mira* には脱意味化し、聞き手を後続発話内容の理解に導こうとする型と、視線を促すよう要求し、その対象を見ることで発話内容を理解させようとする型があることを説明した後の回答と比較した。その結果、日本人学習者には特に *mira* 型を解説なしに習得することが困難であること、*miran* に2つのタイプがあることを説明すると正答率が極めて高くなることが確認できた。このことから、日本人のスペイン語学習者が呼びかけ表現を習得するには、各形式の語彙的意味と脱意味化の程度さによる機能説明が必要である

ことがわかる。

また、どちらも「理解する」を意味し、多くの先行研究で交換可能とされてきた疑問形式¿entiendes?と¿comprendes?に語用論的機能の差があるのかを考察し、現在査読中である。両形式がとる目的語、語彙的意味、そして談話完成タスクの結果を通して、¿entiendes?は話し手の発話行為に聞き手の理解を求めるもの、¿comprendes?は話し手の発話内容に聞き手の理解を求めるという差があることが明らかとなった。¿comprendes?は発話内容の理解のプロセスに、話し手の行動や感情に正当性を見出すという聞き手の判断が含まれるのに対して、¿entiendes?の場合は聞き手がどう反応するかは問題ではなく、話し手への理解に留まる。この差は母語話者への言い換え調査の結果から、¿entiendes?から¿comprendes?への言い換えが¿comprendes?から¿entiendes?への言い換えよりも容認度が下がることにも現れており、理解要求という点においては、¿entiendes?の方が広い意味での理解を表すことを説明した。

このように、呼びかけ表現の機能を語彙的意味と脱意味化の程度差から記述する本研究は、これまで見過ごされてきた機能の差の解明とその応用としての教育に貢献する成果を残したと言えるが、¿sabes?（「知っている」の疑問形式）と¿ves?（ver「見る」の疑問形式）についてはまだ十分に分析ができていない。ここまでの研究で明らかになった他の形式との比較により、疑問形式全体の相関関係の解明を今後の課題とする。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Mei Nomura	4. 巻 79
2. 論文標題 Las funciones pragmaticas de mira, oye y escucha: sus características apelativas y significados lexicos	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Estudios de Linguistica Aplicada	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mei Nomura	4. 巻 -
2. 論文標題 Una propuesta para enseñar el uso pragmatico de oye y mira -a través del significado lexico y el grado de desemantizacion-	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Interaccion, discurso y tecnologia en la enseñanza del español LE/L2/LH	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村明衣	4. 巻 2022
2. 論文標題 スペイン語における文頭、文末表現の機能について mira, oye, fijate を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 HISPANICA / HISPANICA	6. 最初と最後の頁 25 ~ 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4994/hispanica.2022.25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Mei Nomura y Rafael Nevado Gomez
2. 発表標題 Problemas para enseñar las formas apelativas oye y perdona en ELE: analisis de la encuesta a estudiantes japoneses y espanoles
3. 学会等名 XIX Foro internacional de profesores de ELE/L2（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 野村明衣
2. 発表標題 「聞き手めあて」の間投詞 スペイン語呼びかけ表現の場合
3. 学会等名 フランス語学会談話会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野村明衣
2. 発表標題 呼びかけ表現の位置と機能 sabes, entiendes, comprendes を中心に
3. 学会等名 日本イ スペニヤ学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野村明衣
2. 発表標題 「聞き手めあて」の間投詞 スペイン語呼びかけ表現の場合
3. 学会等名 フランス語学会 談話会「フランス語・スペイン語・日本語からみる 間投詞のヴァリエーション」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Mei Nomura, Rafael Nevado Gomez
2. 発表標題 Problemas para enseñar las formas apelativas oye y perdona en ELE: analisis de la encuesta a estudiantes japoneses y espanoles
3. 学会等名 XIX Foro Internacional de profesores ELE/EL2（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 野村明衣
2. 発表標題 呼びかけ表現の脱意味化について-命令形式を中心に-
3. 学会等名 日本イスパニヤ学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野村明衣
2. 発表標題 周辺部におけるスペイン語の注意喚起表現
3. 学会等名 認知語用論研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Mei Nomura
2. 発表標題 Estudio contrastivo sobre las expresiones apelativas en español y japones -su funcion dependiente de la posicion como formas de tratamiento-
3. 学会等名 IV Congreso Internacional Formas y formulas de tratamiento en el Mundo Hispano-Luso (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Mei Nomura
2. 発表標題 Una propuesta para enseñar el uso pragmatico de oye y mira a traves del significado lexico y el grado de desemantizacion
3. 学会等名 33 Congreso Internacional de la Asociacion para la Ensenanza del Espanol como Lengua Extranjera (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
スペイン	Universidad Complutense de Madrid		